

# 南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ

## 第66回 ミナミの国のトイレ事情

日本でも、新型コロナウイルスの感染が広がっています。

中国の武漢で最初に患者が発生したのは、昨年12月のことなので、2ヵ月でアジアだけでなく世界各国に広まったことになります。

この原稿を書いている1月末の時点で、飛行場も鉄道も、高速道路も封鎖されているので、まさに陸の孤島状態。取り残された人たち、とくに日本人駐在員やその家族が、どんな生活を送っているかを思うと、とても他人事とは思えません。

人口が1,100万人ということは、東京の人口が1,300万人なので、ほぼ同規模レベルの大都市です。私が事務所を持っているヤンゴンと比べると、730万人が暮らすヤンゴンのなんと約1.5倍。

これだけの規模の都市が外部から遮断され、街の外に出られないだけでなく、食料品などの物資も入ってこないというのは、想像を絶します。商品のなくなったショッピングセンターの映像や、病院の廊下に溢れる人々の映像を観るにつけ、残された人の絶望を思い、いたたまれない気持ちになります。

武漢ほどの都市であれば、平常時であれば、生活の不安は全くないはず。大使館もあるし、高級スーパーや外国人専用の病院もある。日本とほぼ同じ生活ができていたでしょう。

けれど、非常事態になれば、そうはいきません。ここは外国であるという事実を、嫌と言うほど思い知らされる局面に立たされたのではないのでしょうか。

私自身、3年前にヤンゴンでジョギング中、野犬に噛まれるという事件がありました。

ホテルのフロントに助けを求めると、すぐ隣にあるローカルの病院を勧められましたが、ローカルは怖い(とは、口にだして言いませんでしたが)、どうしても外国人向けの病院に行きたいと主張。それは、何という病院ですか?と聞かれても、パニックになっている、なかなか病院の名前を思い出せません。

兎にも角にも、パスポートと現金だけを掴んで、タクシーに飛び乗ったのですが、部屋に戻ってセイフティボックスを開ける手が震えていたのを覚えています。携帯電話を持って出るのを忘れてしまうほどだったので、よほど動転していたのでしょう。いま思い出しても、心臓がドキドキします。

ともかく1日も早く、武漢に取り残されている日本人たちが救出されることを祈るばかりです(現在はチャーター機で帰国されて

います)。

それにしても、なぜ中国でこのように新型のウイルスが発生してしまうのでしょうか。

私が北京に行ったのは10年前なので、ずい分前の話ですが、当時ホテル以外の場所ではとても、トイレに入れる環境ではありませんでした。レストランでも、天安門でも、トイレは水洗ではなく、お尻を拭いたトイレトーパーパーが、個室内に山盛りに積み重なっていました。トイレに行く時は、外で深呼吸をしてから、ずっと息を止めて…という状況。

そもそもトイレのドアに鍵が付いていないので、うっかり間違えて開けてしまうと、日本とは逆向きに座っている人と目が合って、コンニチハの状態に…。ニオイもさることながら、自分が利用するときは、必死でドアを押さえておかなければなりません。

もちろん今では、相当改善されていると思うのですが…。

ミャンマーも同じです。ヤンゴン市内のホテルや弊事務所が入っているようなオフィスビルでは、トイレに対するストレスは、全くありません。しかし、車で15分も郊外にでると、状況は一変します。

まず、水洗ではなくります。各個室の中にはバケツが置いてあり、柄杓で水をすくって、トイレを流すのです。各個室には水道の蛇口がついているので、自分が使った分だけ、バケツに水を溜めておくのが、ミャンマーのローカルエチケットです。

さらに農村部に行くと、そもそもトイレそのものがありません。家屋の外にゴザのようなもので仕切られたスペースがあり、おそるおそる入ってみると、土に穴を掘っただけの簡易トイレが…。

村人が皆、共同で使いわば公衆トイレのようなもので、そこがいっぱいになると、また別の場所に穴を掘って、使っているようです。

ミャンマーのローカルレストランでは、当然ながら従業員もそのトイレを使います。この国では麺類が定番料理で、どこで食べても美味しいのですが、ただテーブルに運んでくるお姉さんの汚れた親指は、どんぶりの汁の中へどっぴりと浸かって…。

日本では考えられないことですが、文句を言っても状況は変わりません。郷に入らば郷に従え。それが嫌なら、ミャンマーのような途上国で、仕事をしたり生活したりすることはできないのです。

ミャンマー人が食べてお腹を壊さないのであれば、日本人の私と同じものを食べても平気なはずだと、6年前に初めてミヤン

## ◆筆者 原尚美(はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」で全国1位の成績を収め、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性のスタッフ約30名の規模にまで成長。一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社の総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけすぐできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

マーに行ったときから、心を決めていました。

一緒にビジネスをしませんかと話を持ちかけておきながら、ミャンマーの人が美味しいよと、連れて行ってくれたお店で、顔をしかめたり、一口だけ食べて残したりするのは、失礼な話だからです。

美味しい、美味しいと言って、ミャンマー料理を平らげると、最初は外国人向けの綺麗なお店をセレクトしていたミャンマー人も、本当にお勧めのローカルのレストランを紹介してくれるようになります。あー、この人は本気で自分たちの国でビジネスをしようと思っているんだと信用され、それだけ心の距離も、どんどん縮まるというわけです。

5~6年前のミャンマーはまだ、冷凍での流通が発達していなかったもので、さすがに生モノは食べませんでした。ビーチパラソルのような屋台には、よく連れて行ってもらいました。

農村部に行けば、水道もないので、カメに溜めた水で調理した手作りの料理が振る舞われます。

それでもミャンマーに事務所をだしてから今まで6年の間、一度もお腹を壊したことはありません。



農村部でふるまわれた手料理。

視察に訪れる日本人の中には、ホテルや高級レストランで出されるサラダやフルーツにすら手をつけられない人がいます。ホテルで歯磨きをする時ですらミネラルウォーターを使うなど、細心の注意を払っていても、訪問して次の日にはお腹

を下したり、熱をだす人もたくさんいます。

ミャンマー人も日本人も同じ人間。それなのに、同じものを食べているのに、なぜ日本人だけが直ぐにお腹が痛くなるのか、不思議です。

思うに、日本は衛生について、ナーバス過ぎるのではないのでしょうか。外出から帰ったら、うがいや手洗いを習慣づけるのは大切だけど、なんだか度を越してるような気がするのです。

先日テレビの情報番組で、インフルエンザの季節だから、最低でも30秒は手を洗わないといけないと、警告していました。

たしかにミャンマーの農村部では、手洗いの習慣がないために、何人もの子供が生命を落としています。手を洗ったり、ボウフラがわからないように工夫をすれば、救われる生命がたくさん、たくさんあります。

でも現代の日本では、徹底した手洗いを強調するより、もっと免疫力をつけるためにはどうすればいいかを考える方が大切なのではないのでしょうか。

ちなみに、我が家では小学6年生まで、冬でも半袖・半ズボン、くつ下なしでムスコを育てました。その効果かどうかは分かりませんが、彼は水疱瘡やインフルエンザや風疹やらで学級閉鎖になっても、一度も流行りものの病気にかかったことがありません。

グローバルに人が行き来する時代。どれだけ水際で防いでも、検疫を強化しても、これからも新しいウイルスは確実に日本に入ってきて、確実に蔓延してしまうでしょう。江戸時代のように鎖国でもしないかぎり、それは避けられないことだと思うのです。

その時、日本人に足りないものは、正しいマスクの使い方や、手洗いの頻度ではなく、ウイルスに負けない免疫力をつけて、たくましく生きのびる力なのではないかと、コロナウイルスのニュースを観るたび、そんなことを感じる今日この頃です。

好評  
発売中

一生食っていくための「土業」の営業術

原尚美 著(中経出版)

1,500円+税

カネなし。客なし。コネなし。開業と同時に出産したため、普通の新人ならたつぷりあるはずの、時間もなし。文字通りゼロからスタートした会計事務所を、女性だけのスタッフ22名の規模にまで成長させたノウハウについて書いた本です。特別なスキルもコネも持たない、すべての平凡な個人事業者に、ビジネス拡大のヒントが満載です。

